

## フランス語の隠れたしくみ

### 23. 疑問な疑問

東郷雄二

疑問文を作るとき，Oui./Non. で答える疑問文には特に問題がない．ご存じのように，主語と動詞を倒置するか，頭にEst-ce queを付けるか，語尾を上げればよい．ところが，文中の特定の部分をたずねる疑問文はむずかしい．初級レベルの文法説明ではとうていカバーできない．今回はこの問題を考えてみよう．

#### 属詞をたずねる疑問文

なかでも厄介なのが属詞をたずねる疑問文である．属詞 (attribut) とは，être動詞の次に来て主語の性質・属性を表わす語句のことで，以下の例文ではイタリックの部分がそれである．

- |   |                  |
|---|------------------|
| (1) Paul est <i>sympathique</i> .                 | ポールは感じのいい男だ．     |
| (2) Janine est <i>en colère</i> .                 | ジャンニーヌは怒っている．    |
| (3) Jean est <i>peintre</i> .                     | ジャンは画家だ．         |
| (4) Marie est <i>une simple amie</i> .            | マリーはただの友達だ．      |
| (5) La capitale de la France est <i>Paris</i> .   | フランスの首都はパリだ．     |
| (6) Le capitaine est <i>cet homme</i> .           | 船長はあの男だ．         |
| (7) M.Perret est <i>mon professeur de latin</i> . | ペレさんは私のラテン語の先生だ． |
| (8) C'est <i>la clef de ma maison</i> .           | これは私の家の鍵だ．       |

属詞になれるのは，形容詞(1)，前置詞句(2)，裸の名詞(3)，不定名詞句(4)，固有名詞(5)，指示形容詞のついた名詞(6)，定名詞句(7)(8)と様々である．文中での属詞のはたらきが一樣ではないことは，疑問文を作ってみるとすぐわかる．

形容詞(1)と前置詞句(2)はずばり性質・状態を表わしていて，これたずねるには，Comment est Paul ? 「ポールはどんな人ですか」，Comment est Janine en ce moment ? 「ジャンニーヌは今どんな様子ですか」のようにcommentを使う．(3)のように冠詞なしの名詞が属詞になるのは，その名詞が職業・身分・国籍などを表わすときである．疑問文は職業ならばQue fait Jean dans la vie ? 「ジャンは何をしているのですか」，国籍ならばDe quelle nationalité est Jean ? 「ジャンの国籍はどこですか」となる．いずれも属詞を直接たずねる疑問文にはならない．

#### 空の箱と中身の話

ここまでは話の枕でここからが本題である．私がフランス語を教え始めてまもなく，次のようなまちがいをする学習者が多いことに気がついた．

(9) La capitale de la France est *Paris*. という答を導く質問を作りなさい。

答 × Où est la capitale de la France?

どこがおかしいのか．疑問詞のoùである．「フランスの首都はどこですか」という日本語に引きずられたのだろう．oùが使えるのは，属詞が場所・位置を表わすときに限られる．Où sont vos enfants? — Ils sont *ici*. 「お子さんたちはどこですか」「ここにいます」ならば，*ici*は子供たちがいる場所を表わすのでoùでたずねることができる．しかし(9)で*Paris*はフランスの首都が位置する場所を表わしているのではなく，「フランスの首都」という呼び名に当てはまる項目を指定している．言い換えるとこの質問は，「フランスの首都」に該当するのはパリかリヨンかマルセイユかとたずねているのだ．このとき「フランスの首都」はラベルが貼られた空の箱であり，そのラベルに該当する中身を入れるよう要求するのが(9)の疑問文である．

フランス語の疑問文の大原則は，「空の箱に入れるものをたずねるときは*quel*を用いよ」というものである．だから(9)の正解は*Quelle est la capitale de la France?*なのである．似たような例をあげてみよう．

(10) あなたの愛読書は何ですか? *Quel est votre livre favori?*

(11) この絵の値段はいくらですか? *Quel est le prix de ce tableau?*

(12) あなたの携帯番号は何番ですか? *Quel est votre numéro de portable?*

日本語の質問の「何」「いくら」「何番」に引きずられてはいけない．「あなたの愛読書」「この絵の値段」「あなたの携帯番号」はすべて空の箱である．(10)の質問に「何」を意味する*que / qu'est-ce que*を使いたい誘惑に駆られる人は多いが，それはまちがいである．(11)(12)でも*combien*を使うことはできない．

モノではなく人の場合，それをたずねる質問には*qui*を用い，*Qui est le capitane de ce bateau?*「この船の船長は誰ですか?」となる．こちらはまちがいが少ない．

正体をたずねる疑問文

先ほどのたとえをもう一度使うと，たずねる対象が空っぽの箱ではなく，すでに中身が入っている箱のとき，疑問文はどうなるだろうか．これは単なるラベルではなく眼の前にいる生身の人，手にしているモノの正体がわからないという場合に相当する．すると質問はおのずから「誰，何?」となるだろう．このように正体をたずねるときには，人には*qui*を，モノには*qu'est-ce que*を使う．

(13) *Qui est cet homme?* この人は誰ですか?

(14) *Qu'est-ce que c'est?* これは何ですか?

モノについては「何」*qu'est-ce que*しか使えないのでよいとして，人については実は

もうひとつのたずね方がある。

(15) *Qu'est-ce qu'elle est pour vous? — Une simple amie.*

「あなたにとって彼女は一体何なんですか?」「ただの友達ですよ」

ふつう人については「誰」とたずね、「何」とたずねることはあまりないことだが、(15)のような例がないわけではない。「誰」という質問には「山田さん」のような名前、「私の弟」のような親族関係、「この会社の社長」のような役職名が答えとして考えられる。一方、「何」とたずねられたら、「一番の親友」とか「不倶戴天の敵」のように、関係を示す表現で答えることが多いだろう。

上に見たように、人の場合、空の箱の中身をたずねるときも正体をたずねるときも疑問詞はquiを使う。だから*Qui est le capitaine?*という疑問文にはふたつの意味があることになる。一つ目は箱の中身をたずねる場合で、「船長は誰ですか」という意味である。もう一つは船長と称している男の正体をたずねる場合で、「あの船長は一体何者ですか」という意味になる。このとき*le capitaine*は空の箱ではなく実体を備えた生身の人間である。このふたつの意味は間接疑問文にしたとき、語順のちがいとなって現われる。

(16) *Je me demande qui est le capitaine.* 「船長は誰なんだろう?」

(17) *Je me demande qui le capitaine est.* 「あの船長は一体何者なんだろう?」

疑問に答えるときの代名詞

さて、疑問文の話でいつも忘れられるのが答え方で、属詞が関係する疑問文では特に答の文の主語代名詞に何を使うか問題となる。

(18) *Comment est son fiancé? — Il est sympathique.*

「彼女の婚約者はどんな風ですか?」「感じのいい人ですよ」

(19) *Comment était sa maison? — Elle était dans un état déplorable.*

「彼(女)の家はどんな状態でした?」「ひどい有り様でした」

属詞が性質・状態を表わすときには、答には人称代名詞*il/elle*を使う。一方、次の例のように、空の箱の中身をたずねる疑問文の答えには、人かモノかに関係なく*ce*を使う。

(20) *Qui est le capitane de ce bateau? — {C'est / × Il est} Jean.*

「この船の船長は誰ですか?」「ロベールです」

(21) *Quel est votre livre favori? — {C'est / × Il est} L'Etranger de Camus.*

「あなたの愛読書は何ですか?」「カミュの『異邦人』です」

日本語でも(20)の答は「それはロベールです」で、「彼はロベールです」とは言わない。日本語では空の箱は「それ」と呼ばなくてはならないのである。

ところが正体をたずねる疑問文の場合、空の箱ではなく中身も入っているにもかかわらず、人にもモノにも指示代名詞*ce*を使わなくてはならない。

(22) Qui est ce monsieur? — {C'est / × Il est} le fils de Jean.

「あの男性はどなたですか?」「ジャンの息子さんです」

Who is that man? — *He* is John's son. のように*he*を使う英語とここがちがうのでまちがう人が多い。なぜフランス語では*ce*を使わなくてはならないのだろうか。〈主語 + être + 属詞〉という形の文に限って言うと、正体がわかっていないと*il/elle*を使えないのである。フランス語では一般に、名前のわからないもの、性も数も判然としないものには指示代名詞*ça/cela*を使う。*cel*は*ça/cela*と同類である。この辺に理由があるようなのだが、ここらで紙幅が尽きた。これ以上の話はまたの機会にということにしよう。  
(とうごう・ゆうじ)